

# 軟骨魚類との関わり

西田 清徳

プロフィール  
1958年大阪府生まれ。海遊館館長。北海道大学大学院水産学研究所博士課程修了、水産学博士。1989年から海遊館の建設計画に携わり、沖縄県からジンベエザメの長距離輸送を成功させた。1997年に高知県に海洋生物研究所を設置、イトマキエイ類、オナガザメ類の採食方法を解明。2007年より現職。著書には『日本の水族館』（東京大学出版会）、『布利黒潮の魚』（大阪海遊館）等多数。

フランスの海洋生物学者ジャック・イブ・クストーの書籍で軟骨魚類（サメ・エイ・ギンザメ）に出合ってから、四六年間その探求に関わってきた。図鑑や海洋冒険小説、映画までサメやエイの情報を手当たり次第に集め、大学では軟骨魚類の系統分類学を学んだ。系統分類学は対象とする生物群がいつ頃、どのような仲間から分かれ、彼らがどのように適応して多様な種を生み出してきたのかを解き明かす。近年は遺伝情報解析技術が飛躍的に進歩して、その強力な武器となつていくが、四半世紀前は外部形態、骨格や筋肉、血管や神経などの比較に基づく解析が主流であった。そのため、先ず標本が必要だが、大型種が多く漁獲量も少ない軟骨魚類の標本は大学や博物館にも少なく、漁港に水揚げされる種類も僅かであった。

この状況を打開してくれたのが水族館の存在で、系統解析のキーとなるような大型のサメやエイが目前の水槽で暮らしている。しかも、サメが口を突出させて大きな餌を食べ、エイが胸鰭を波打たせながら泳ぎ、オスがメスに咬みついて（オスの歯がメスより尖っている場合もある）交尾をしたり、卵や子を産んだりすることもある。そこには、標本観察だけでは判らない、彼らの「生き様」が感じられた。

この体験から、軟骨魚類は系統分類の対象だけでなく、四億年の進化の歴史を語ってくれる特別な存在となった。多くの方々にサメやエイの生物学だけでなく生き様も伝えるため、ヒトとの関わりも含めたもつと多くの事を知りたいと感じ、ヒトと軟骨魚類の関わりを探るようになった。すると古来より、サメの歯がメリケンサック（手につけてパンチ力を強化する武器の一種）に埋め込まれ、エイの尾棘（尾の付け根にある毒トゲ）が槍先に利用されていたり、サメの頭部を模した被り物が祭事に使われたり、痔疾を治す祈願の絵馬にアカエイが描かれていたり、日本だけでなく世界中で興味深い事例が見つかり始めた。

サメやエイのような海の生き物と、食料や道具としての物質的な利用価値以外の関わりをもつのは、私たちの心の中に生き物に対する「興味」「驚異」「畏敬」など多様な感覚が、進化の記憶と共に残されているからだろうか。

八月二十九日から国立民族学博物館で開催されている特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」では、ヒトと軟骨魚類との関わりから想像された「天狗の爪?」「人魚の財布?」「宇宙人?」も展示されるので、ご覧いただきたい。

## 月刊 みんなぱく

9月号目次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/><b>軟骨魚類との関わり</b><br/>西田 清徳</p> <p>2 <b>特集 奴隷展示は問う</b><br/>奴隷展示を介した過去、現在、そして未来<br/>鈴木 英明</p> <p>4 リヴァプールの国際奴隷博物館<br/>井野瀬 久美恵</p> <p>6 アクラの「ブラジル人」<br/>——ブラジル・ハウスを訪ねて<br/>鈴木 茂</p> <p>8 スリナムの奴隷廃止記念碑をめぐる<br/>——スリナムに奴隷博物館がないのはどうして?<br/>吉田 信</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド<br/><b>サンゴの海で漁師になる</b><br/>小野 林太郎</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 想像界の生物相<br/><b>刺繍に見るミャオ族の宇宙</b><br/>横山 廣子</p> <p>16 みんなく回遊<br/><b>みんなくレプリカめぐり</b><br/>末森 薫</p> <p>18 シネ倶楽部 M<br/><b>100年前のボクシング</b><br/>——「チャップリンの拳闘」<br/>樫永 真佐夫</p> <p>20 こぼの迷い道<br/><b>真実はふたつ?</b><br/>肥後 時尚</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|